

邪馬台国宇佐説

—卑弥呼と宇佐神宮比売大神は同一人物！

2013.11.24 鷺崎弘朋

於：宇佐神宮参集殿

I 魏志倭人伝

魏志倭人伝を抜きにした邪馬台国論は有り得ない。原点に戻り、倭人伝から邪馬台国の位置を解明する。

① 里程・日程の行程論

～連続式と放射式読法

② 「短里」「短日」の組合せ

「水行」は潮流の影響

③ 方向の論理

～65度修正で全て矛盾せず

II 卑弥呼と宇佐神宮

① 卑弥呼＝比売大神＝天照大神

② 宇佐神宮の亀山が卑弥呼の墓

③ 謎の石棺の目撃証言

④ 奴婢百余人の殉葬と百体神社

III 宇佐地方の考古学

① 宇佐を中心とする「豊の国」

② 弥生時代の文化圏と邪馬台国



宇佐神宮本殿



I 魏志倭人伝

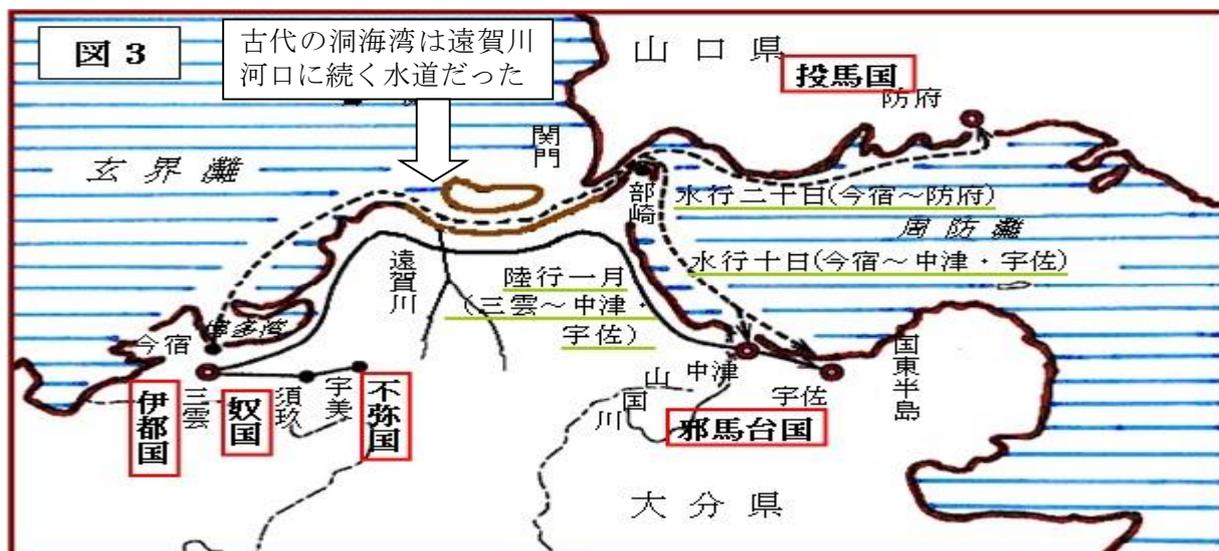
1 伊都国・投馬国・邪馬台国・狗奴国

伊都国は福岡県糸島市「三雲」、投馬国は山口県防府「玉祖」、邪馬台国は宇佐「山戸」を中心とする豊の国、狗奴国は南九州。

(注) 防府「玉祖」は内藤湖南(邪馬台国畿内説)が投馬国とした(「卑弥呼考」1910年)。

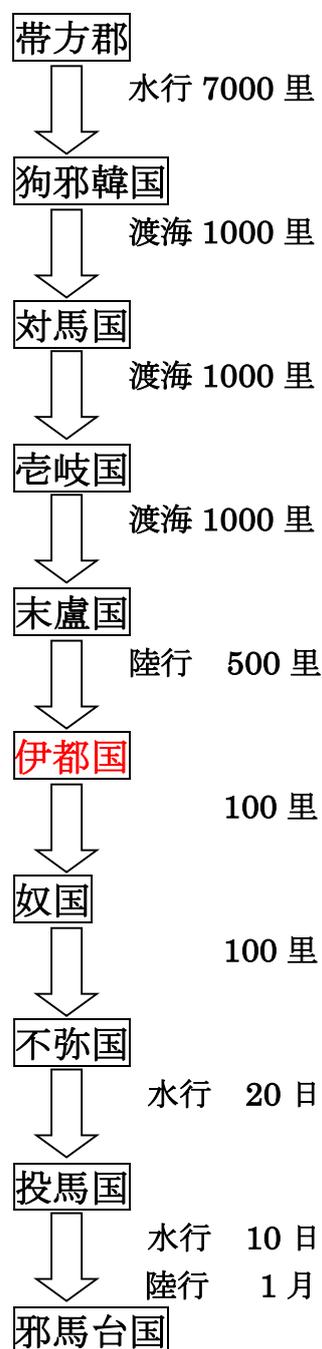


2 博多湾からは放射式の記載

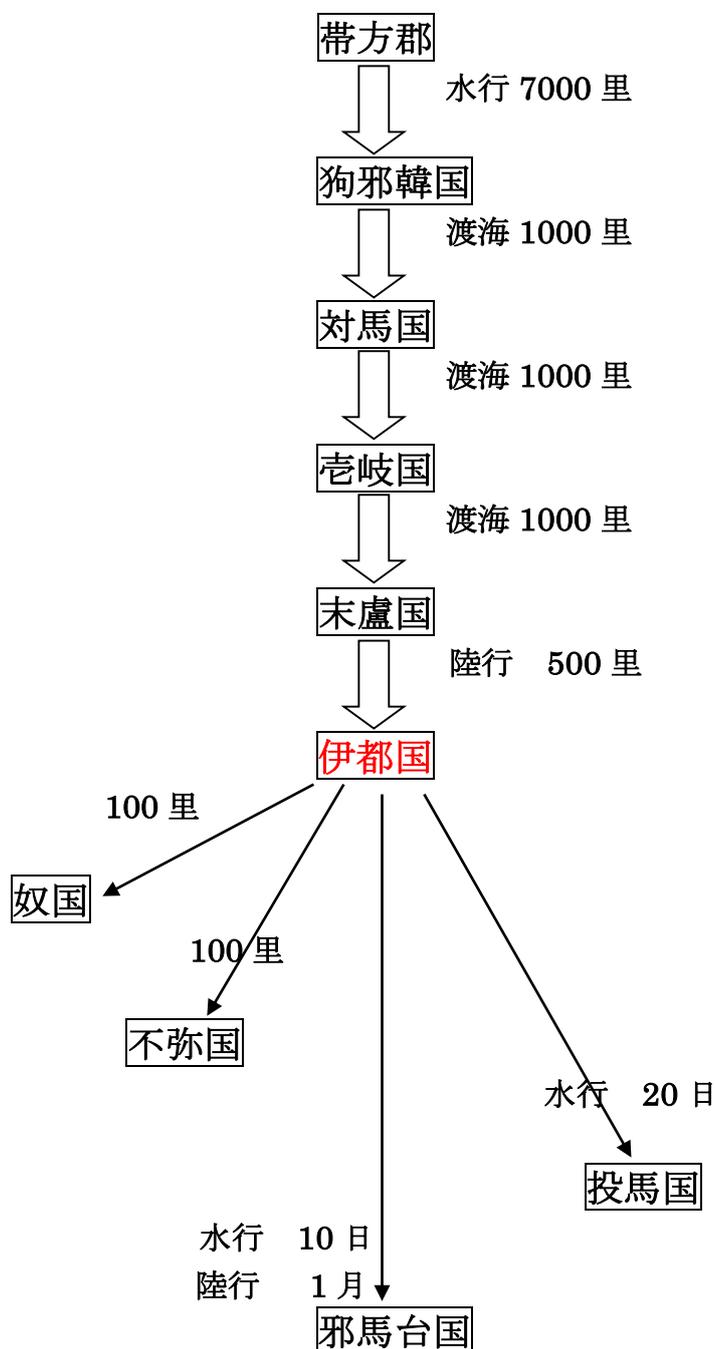


魏志倭人伝の行程記事

連続式読法



放射式読法 (榎一雄説)



漢文の文法は柔軟で、伊都国以降の行程は連続式にも放射式にも読める。連続式では通常は**行程・国名**の順番、放射式は**国名・行程**と逆で、**伊都国**以降は国名・行程の記述となっている。ただし、これは絶対ではなく、文章の前後関係などを含め読み取ることが重要。

4 里程は「短里」

倭人伝の里数は約 **5 倍の誇張** があると言われる。三国時代の魏晋朝では 1 里 = 434m であった。ところが、

4.1 『魏志韓伝』『魏志倭人伝』

朝鮮半島で地域的に行われた「短里」(85~90m) で記載。これは古代周王朝の「短里」を踏襲した可能性がある。

① 『魏志韓伝』—朝鮮半島南部の「韓地は方 4000 里」
実測で東西 300~360 km、南北 300~360 km
 $300\sim 360\text{ km} \div 4000\text{ 里} = 1\text{ 里は } 75\sim 90\text{ m}$

② 『魏志倭人伝』—**1 里は 85~90m** の「短里」

表 1：帯方郡～不弥国までの実測距離 $933\text{ km} \div 10700\text{ 里} = 87\text{ m/里}$

行程区間	倭人伝	実測距離
帯方郡(水行起点は仁川・江華島付近) ～狗邪韓国(金海)	水行 7000 里	645 km
狗邪韓国(金海) ～対馬国(鹿見)	渡海 1000 里	68 km
対馬国(鹿見) ～一支国(壱岐の勝本)	渡海 1000 里	93 km
一支国(勝本) ～末盧国(唐津市)	渡海 1000 里	55 km
末盧国(唐津市) ～伊都国(糸島市)	陸行 500 里	46 km
伊都国(糸島市) ～奴国(春日市)	100 里	18 km
奴国(春日市) ～不弥国(宇美町)	100 里	8 km
合計(帯方郡～不弥国)	10700 里	933 km

4.2 帯方郡から**邪馬台国まで 12000 里** (自郡至女王国、萬二千余里)

全行程 12000 里から不弥国までの 10700 里を引くと、残りは 1300 里となる。

$1300\text{ 里} \times 85\sim 90\text{ m} = 111\sim 117\text{ km} \Rightarrow$ **邪馬台国は北部九州** に位置する。

5 日程は倭人の「短日」

5.1 古代倭人は距離を日数で表示

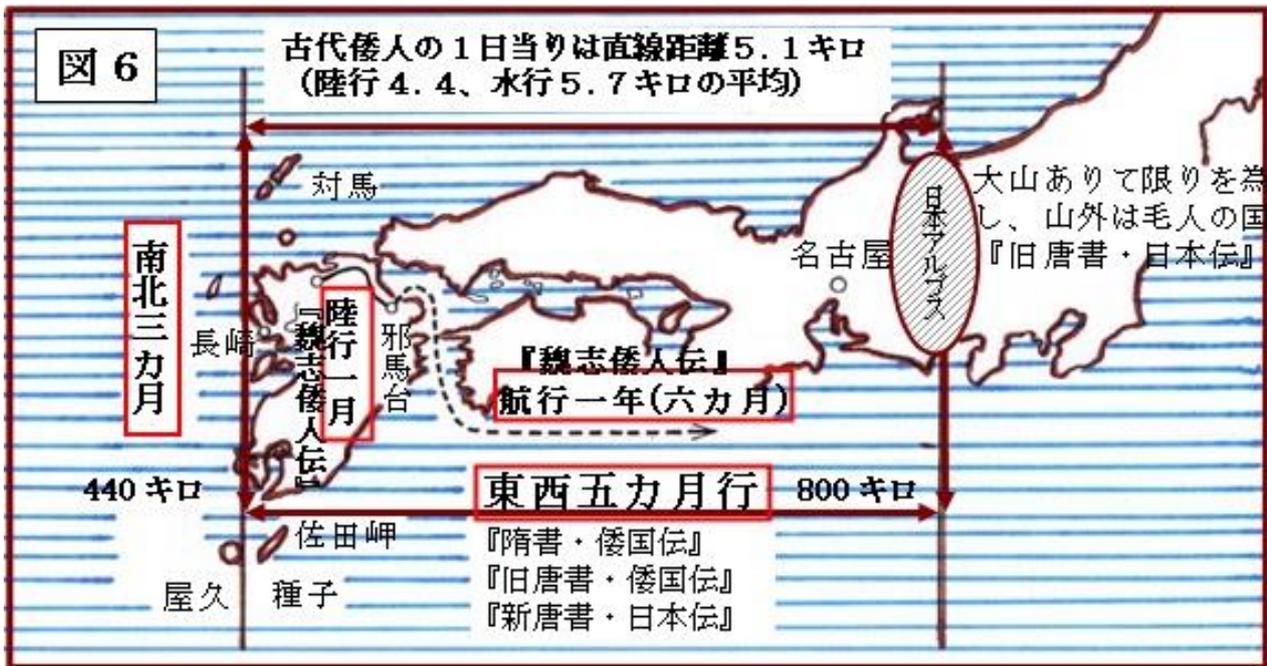
『隋書倭国伝』一夷人は**里数を知らず**、ただ日を以って計る

5.2 『隋書』『北史』『通典』『旧唐書』『新唐書』の倭国領域

「東西五カ月行」「南北三カ月行」は倭人が述べた「短日」表示

「**東西五カ月**」＝九州～日本アルプス 800 km（最大関東まで）
『旧唐書』の「大山有りて限りをなし山外は毛人の国」の「大山」は日本アルプス

「**南北三カ月**」＝対馬～佐田岬 440 km



5.3 倭人の1日当りの行程は5.1 km（地図上の直線距離で）

$$800 \text{ km} \div 150 \text{ 日 (5カ月)} = 5.3 \text{ km}$$

$$440 \text{ km} \div 90 \text{ 日 (3カ月)} = 4.9 \text{ km}$$

水陸行の平均 **5.1 km** ⇒ 「短日」

「水行二十日」（投馬国）、「水行十日陸行一月」（邪馬台国）は、帯方郡使が博多湾岸（伊都国・奴国・不弥国）の倭人から聞いた日程で、倭人の「短日」表示 ⇒ **日数は誇張ではない**。

5.4 中国での「陸行」「水行」距離

唐『六典』では、1日当り陸行 50 里、静水時で水行 60～70 里、平均 65 里である。唐の時代は 1 里＝560m であるから、1日当り陸行 50 里＝28.1 km、水行 65 里＝36.4 km となる。

<唐『六典』第3巻戸部の条>

河＝黄河、江＝揚子江、余水＝その他河川、泝＝川を遡る、を意味する。

「凡陸行之程、馬日七十里、歩及驢五十里、車三十里、水行之程、船之重者、泝河日三十里、江四十里、余水四十五里、空船泝河四十里、江五十里、余水六十里、沿流之船、則輕重同制、河日一百五十里、江百里、余水七十里」

表 2：唐時代の水行距離

水行距離(1日当り)	黄河	揚子江	その他の河川
川を遡る(船之重者～空船)	30～40里	40～50里	45～60里
川を下る(船の輕重に関係ない)	150里	100里	70里

川を遡る	静水時	川を下る
30～60 里	60～70 里	70～150 里

三国時代の魏晋朝では、1 里＝434m であつた。三国時代も 1日当り陸行 50 里で、陸行 50 里＝21.7 km、水行 65 里＝28.2 km となる。これは、唐時代より短い。

表 3：唐/魏晋朝の比較	唐	魏晋朝
1 里の距離	560m	434m
1 日当りの陸行	50 里＝28.1 km	50 里＝21.7 km
1 日当りの水行 (静水時)	65 里＝36.4 km	65 里＝28.2 km

<三国時代の1日当り陸行距離>

238 年、司馬懿(仲達)が遼東の公孫淵を4万の遠征軍で討伐するに際し、「洛陽から襄平まで 4000 里」「行くに 100 日、攻めるに 100 日、還りに 100 日、休息に 60 日、合計 1 年で足りる」とした(『三国志』魏書明帝紀など)。このことから、魏晋の陸行は 1日当り 40 里との説がある(山尾幸久)。しかし、①魏晋 40 里×434m＝17.4 km、唐 50 里×560m＝28.1 km とすると、唐が魏晋より 60% も距離が長くなり考えにくい。従って魏晋も 50 里で、これでも唐より 30% 少ない。②遠征軍は大量の食料・武器・衣類を伴う重装備の行軍で、通常の陸行よりスピードは遅い。重装備で 40 里なら、通常標準はやはり 50 里程度と考えるのが妥当である。

5.5 「水陸行」の比例関係

中国での「陸行」「水行」の比率は 50 里 : 65 里。日本での比率も基本的には同じ。そこで、倭人の「短日」5.1 kmを「陸行 50 : 水行 65」の比率で分解すると、陸行=4.4 km、水行=5.7 kmとなる。

表 4 : 魏晉/倭人伝	A : 魏晉朝	B : 倭人伝	倍率(A÷B)
1 里の距離	434m	87.5m (短里)	5 倍
陸行の 1 日当り	21.7 km	4.4 km (短日)	5 倍
水行の 1 日当り	28.2 km	5.7 km (短日)	5 倍

<古代倭人の短日> 1日当り陸行 4.4 kmを例にとると、この 4.4 kmはあくまで地図上の直線距離で、一種の「距離単位」である。古代の道は曲りくねり、山あり川ありで、実際の歩行距離は約 2 倍の 10 km ぐらいでも不思議ではない。更に、「草木茂盛し行くに前人を見ず」の獣道のような、ジャングルのような道なき道を行くので体力消耗（エネルギー消費）は整備された平坦な道路の 2~3 倍の可能性がある。平坦な道を「すたすた歩く」のとは全く違う。そうすると、古代の歩行距離 10 km のエネルギー消費は、現代感覚では 10 km × 2~3 倍 = 20~30 km に相当する。魏晉時代の中国でも整備された道路で 1 日当り 21.7 km、また唐時代でも 28.1 km の歩行標準であった。従って、直線距離 4.4 km = 歩行延べ距離 10 km = エネルギー消費同等距離 20~30 km（整備された道路）、ということであって、古代倭人の「短日」は決して不自然ではない。

倭人伝は魏晉朝の 5 倍である（表 4）。倭人伝は朝鮮半島の地域的な「短里」と倭人の「短日」の組合せで、誇張ではない。この「短里」「短日」で「水行 20 日」「水行 10 日陸行 1 月」を計算すると、

$$\begin{aligned} \text{水行 20 日} &= 20 \text{ 日} \times 5.7 \text{ km} = 114 \text{ km} \\ \text{水行 10 日} &= 10 \text{ 日} \times 5.7 \text{ km} = 57 \text{ km} \\ \text{陸行 1 月} &= 30 \text{ 日} \times 4.4 \text{ km} = 132 \text{ km} \end{aligned}$$

これを現実の北部九州の地理と比較して、宇佐説は成立するのか？

6 邪馬台国へ「陸行 1 月」

伊都国から邪馬台国の残り 1500 里は理論値 131 km（1500 里 × 87.5 m）。また、陸行 1 月の理論値は 132 km（30 日 × 4.4 km）。一方、現実の地理は糸島市三雲（伊都）から海岸沿い（国道 3 号、10 号）に中津宇佐（邪馬台）まで 123~138 km である。このように、①1500 里②陸行 1 月③現実の地理の三者は完全に一致する（表 5）。

表 5： ①1500 里②陸行 1 月③現実の地理は**完全に一致**

伊都国～邪馬台国	1500 里	131 km (1500 里×87.5m)
伊都国～邪馬台国	陸行 1 月 (30 日)	132 km (30 日×4.4 km)
糸島市～中津宇佐	国道 3 号、10 号	123～138 km (実測距離)

なお「**水行 10 日・陸行 1 月**」は、「水行では 10 日または陸行なら 1 月」で、**並列読みが正しい**。倭人伝の旅程は、直後に必ず到達国を記載する。連続的に読むとすれば、表 6 の「水行 10 日」の直後に到達国名が必要となる。中国古文の専門家・張明澄は、連続的に読むとすれば「水行 10 日」と「陸行 1 月」の間に「**さらに**」との言葉が必要とする。また、宮崎康平が「水行 10 日で邪馬台国に至るが陸行できないこともない。もし陸行すれば 1 月を要するとの**付言**」としたのも、注目に値する（『まぼろしの邪馬台国』1967 年）。

表 6：「水行 10 日」に**到達国**が記載されていない

出発地	旅程	到達地
帯方郡	水行 7000 里	狗奴韓国
狗奴韓国	渡海 1000 里	対馬国
対馬国	渡海 1000 里	一支国
一支国	渡海 1000 里	末盧国
末盧国	陸行 500 里	伊都国
伊都国	100 里	奴国
奴国	100 里	不弥国
(博多湾)	水行 20 日	投馬国
(博多湾)	水行 10 日	—— (記載なし)
	陸行 1 月	邪馬台国
女王国	渡海 1000 里	倭種の国
女王国	4000 里	侏儒国
(女王国)	船行 1 年	裸国・黒齒国

7 「水行 20 日」、「水行 10 日」

7.1 実測距離と理論距離

- ① 水行 20 日 = 博多湾～ 投馬国 (防府「玉祖」) = 157 km (実測)
- ② 水行 10 日 = 博多湾～ 邪馬台国 (中津・宇佐) = 138～153 km (実測)

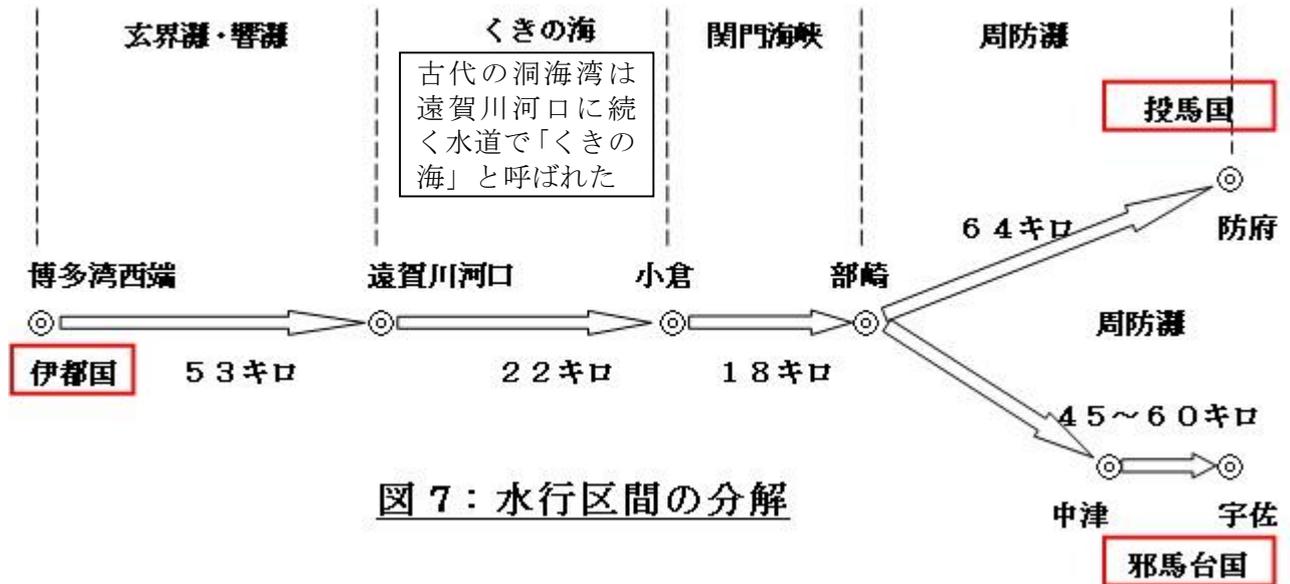


図 7：水行区間の分解

表 7：距離の比較	実測距離	理論距離
水行 20 日 博多湾～投馬国	157 km 関門経由で防府「玉祖」	114 km (20 日 × 5.7 km)
水行 10 日 博多湾～邪馬台国	138～153 km 関門経由で中津宇佐	57 km (10 日 × 5.7 km)

表 7 で示すように、実測距離と理論距離が大幅に乖離する。これは海流（潮流）の影響で、その実態を以下で明らかにする。

7.2 潮流による水行距離の変化

海では**潮流の影響**を大きく受ける。魏晋時代の静水時の1日当りは28.2 kmである。これは、朝8時～夕方5時の9時間から昼食・休憩2時間を除く実働7時間の距離である。

そうすると、潮流が1ノット（時速1852m）増すごとに1日当たりが7時間×1852m=13.0 km伸びる（表8）。

表8：魏晋/倭人伝	A：魏晉朝	B：倭人伝	倍率(A÷B)
1里の距離	434m	87.5m（短里）	5倍
陸行の1日当り	21.7 km	4.4 km（短日）	5倍
水行の1日当り	28.2 km	5.7 km（短日）	5倍
潮流が 1ノット 増す毎に伸びる1日当たりの水行距離	13.0 km	2.6 km （短日）	5倍

それでは、倭人伝の場合はどうなるか。魏晉朝の「里」単位、1日当たり距離、倭人伝の「短里」、倭人の「短日」は、もちろん内容が異なる。しかし、制度の**比例関係**は整合性を持つ。

表8によれば、魏晉朝：倭人伝=5：1の倍率である。そこで倭人の「短日」による水行を比例計算すると、静水時の1日当たり5.7 kmに対し、潮流が1ノット増す毎に**2.6 km伸びる**（表8）。

7.3 干潮・満潮で水行スピードは大幅変化



博多湾から中津宇佐(邪馬台)まで陸路は1カ月を要するが、海路123～138 kmは関門海峡・周防灘の干潮時の流れが速く、わずか10日で到達する。ところが山口県側は干潮時に逆転潮流が発生し、水行スピードは大幅に低下する。このため、防府(投馬)への157 kmは20日を必要とする。

これは、関門海峡をはさみ日本海と周防灘の海面の水位は日本海側が約30 cm高いことと、周防灘の地形的特徴による。古代瀬戸内海航路では、北部九州から難波に行くには関門海峡を抜け干潮時の潮流に乗り、豊前側を南下し国東半島沖の姫島付近に至り、それから東へ航行したのは多くの古記録で明らかである。



図 10-2 流体力学による周防灘潮流模式図

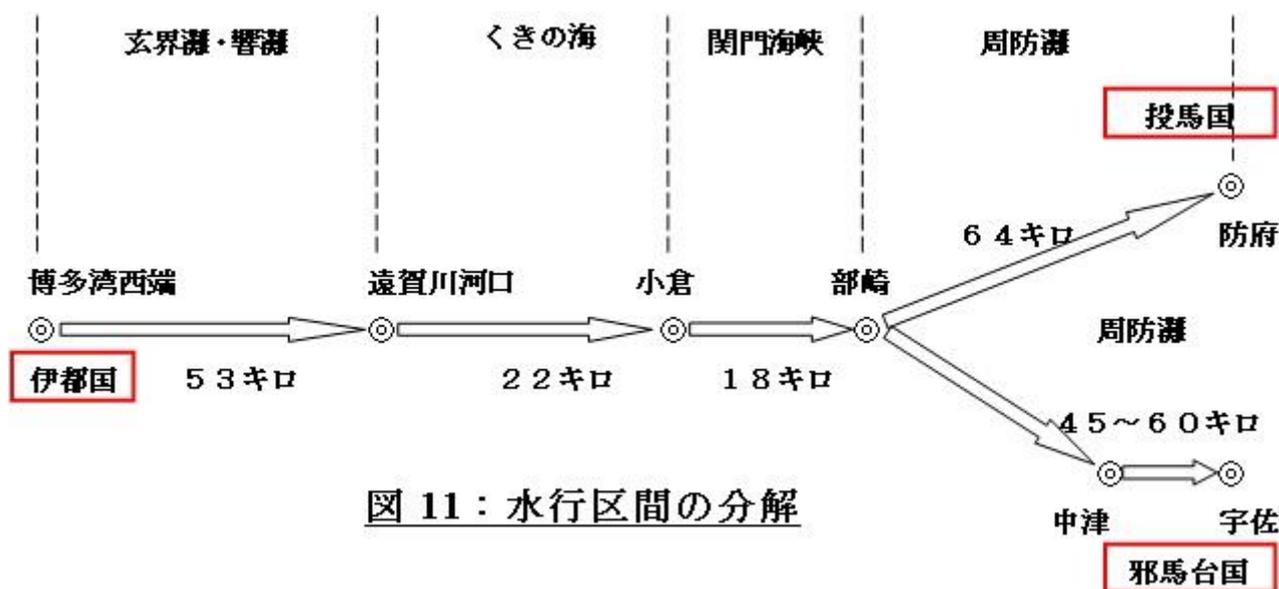
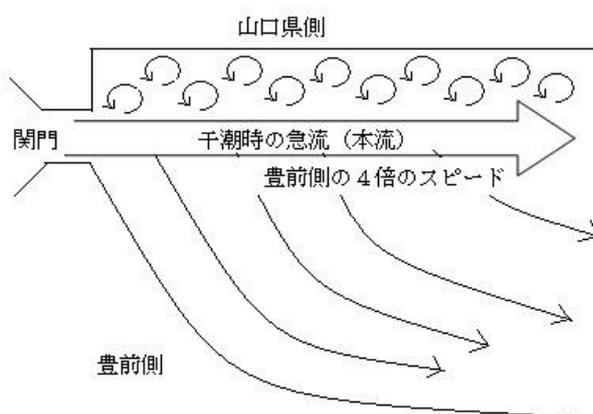


図 11：水行区間の分解

(注) 古代の洞海湾は遠賀川河口の響灘に続く水道で「くきの海」と呼ばれた。

以上の潮流の条件を考慮して「水行 20 日」「水行 10 日」を計算すると以下の通り。

表 9：水行区間の所要日数

水行区間	距離	沖合潮流	距離/1 日	所要日数
博多湾西端～遠賀川河口	53 km	2 ノット	10.9 km	4.86 日
遠賀川河口～小倉	22	3	13.6	1.62
小倉～部崎	18	6	21.4	0.84
部崎～防府	64	0	5.7	11.23
部崎～中津宇佐の中間	53	2	10.9	4.86

①各区間の沖合潮流は海上保安庁第 7 管区の実地調査などによる。

②沖合潮流が 1 ノット（時速 1852m）増しても 1 日当りは 2.6 km しか伸びない。例えば、周防灘の豊前側では沖合は 2～3 ノットだが、海岸近くは 0.4～0.6 ノットで 5 分の 1 しかない。古代倭人は海岸近くを尺取虫で水行したので、沖合潮流が 1 ノット増しても、沿岸では効果が 0.2 ノットしかない（1 日実働 7 時間：1852m×0.2×7 時間＝2593m＝2.6 km）。

投馬国 $4.86 + 1.62 + 0.84 + 11.23 = 18.55$ 日

邪馬台国 $4.86 + 1.62 + 0.84 + 4.86 = 12.18$ 日

ただし、①起点が博多湾（幅 20 km）東端では 1.83 日が短縮、

②「部崎～防府」は干潮時の逆転潮流を横切るのので、陸行と同じ 1 日 4.4 km～低下する可能性がある。

そうすると、防府へは 3.3 日が延長、

③「部崎～中津宇佐の中間」の潮流を 3 ノットとすると中津宇佐へは 0.96 日が短縮される。

これらの 3 点を考慮すると、以下のようになる。

投馬国 $3.03 + 1.62 + 0.84 + 14.55 = 20.04$ 日

邪馬台国 $3.03 + 1.62 + 0.84 + 3.90 = 9.39$ 日

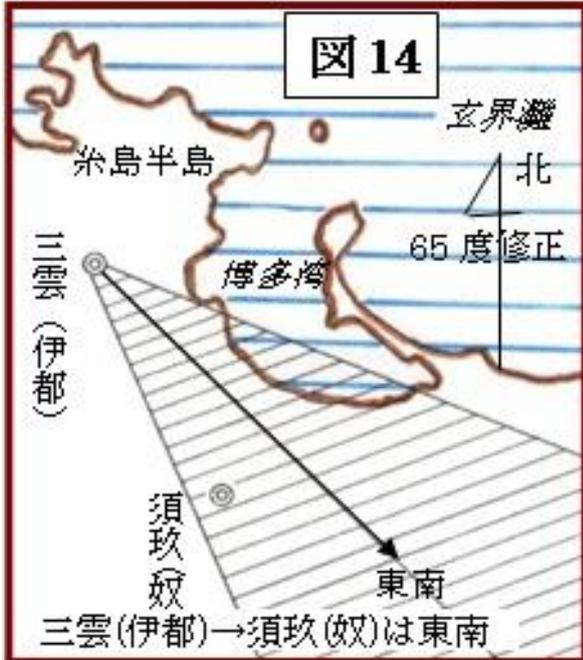
以上を総合すると、表 10 のように倭人伝と完全に一致する。

表 10 「水行 20 日」「水行 10 日」の実際の所要日数

水行区間	実際の所要日数	倭人伝
博多湾～防府（投馬）	18.55～20.04 日	20 日
博多湾～中津宇佐（邪馬台）	9.39～12.18 日	10 日

9 方向を全て 65 度修正で矛盾せず

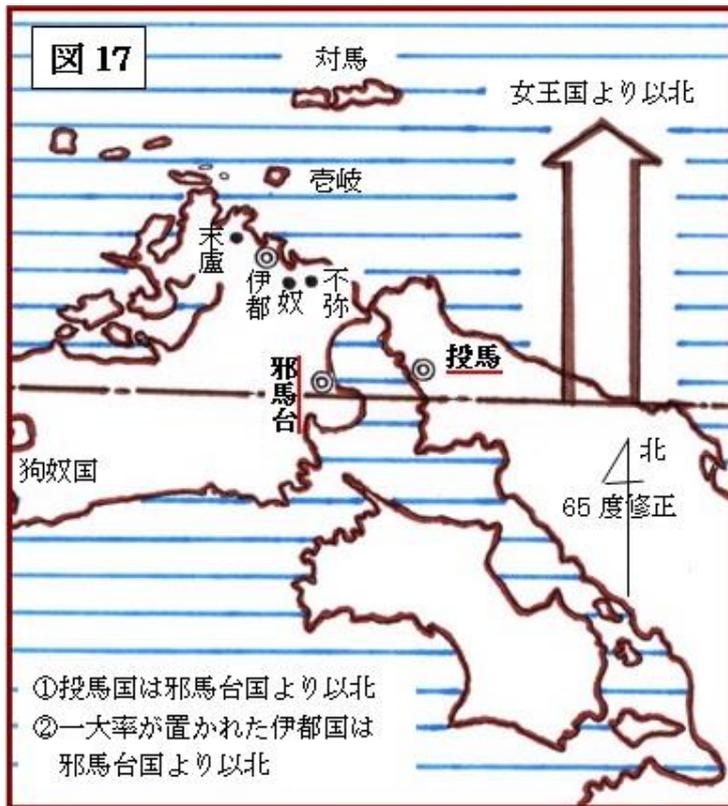
9.1 「(伊都国より) 東南、奴国に至る百里」 「東行、不弥国に至る百里」



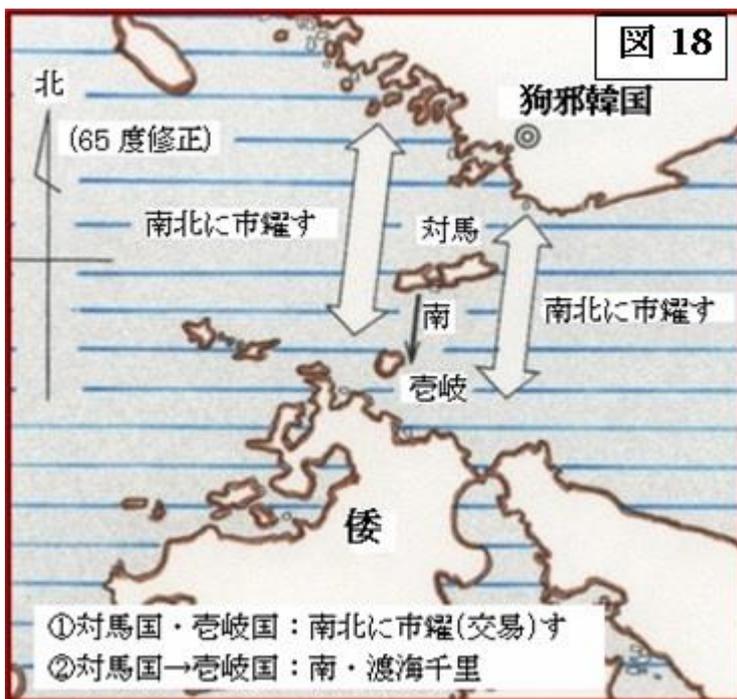
9.2 「南、投馬国に至る水行二十日」「南、邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月」



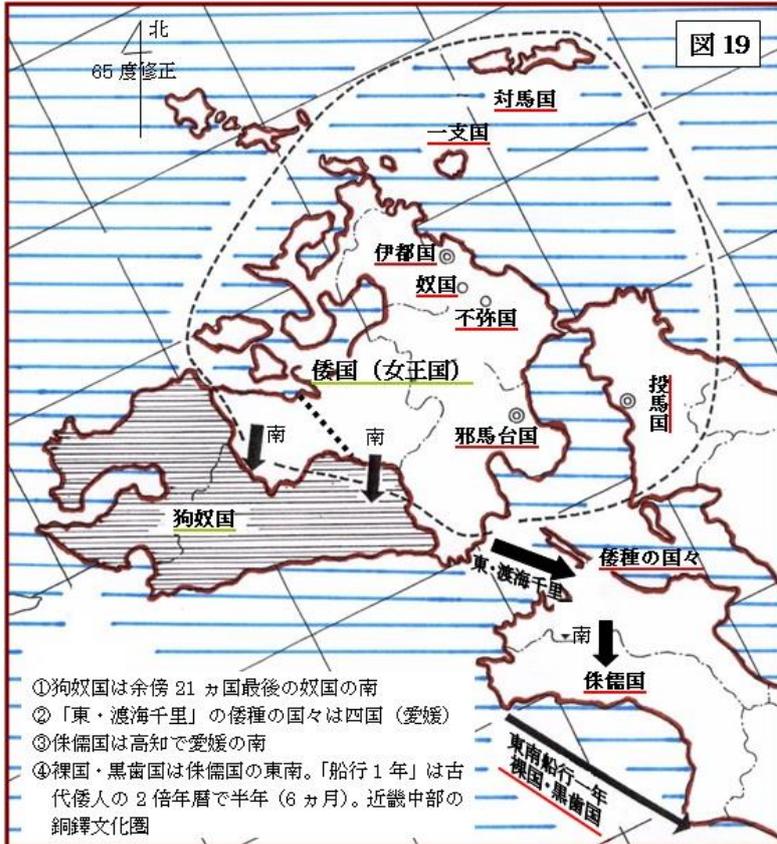
9.3 「女王国より**以北**、其の戸数・道里は略載す可きも・・・」
 「女王国より**以北**、特に一大率を置き・・・常に伊都国に治す」



9.4 「(対馬国) 船に乗り**南北**に市テキ (交易) す」「また**南一海**を渡る千余里・・・壱岐国に至る。また**南北**に市テキす」



9.5 「其の（女王の境界が尽きる所の）南に狗奴国が有る」
 「女王国の東、海を渡る千余里、また国有り、みな倭種」
 「また侏儒国有り、其の南に有り・・女王を去る四千余里」
 「また裸国・黒齒国有り、また其の東南に在り、船行一年で至るべし」



注：＜大陸側から見た日本列島の地理観＞

歴代中国 14 史書は、日本列島を全て朝鮮半島の「東南」とする。すなわち、

『漢書』（三国時代魏の如淳の注）：帯方の東南、『魏略』（3 世紀後半作）：帯方の東南、『三国志』（280 年代作）：帯方の東南、会稽東冶の東、『後漢書』（5 世紀前半作）：韓の東南、『宋書』（488 年作）：高麗の東南、『南齊書』（510 年頃作）：帯方の東南、『隋書』（636 年作）：百濟新羅の東南、『晋書』（646 年作）：帯方の東南、『北史』（659 年作）：百濟新羅の東南、『翰苑』（660 年作）：韓帯方楽浪の東南、『通典』（801 年作）：帯方百濟新羅の東南、『旧唐書』（946 年作）：新羅の東南、『唐会要』（961 年作）：新羅の東南、『新唐書』（1060 年作）：新羅の東南——は、全て日本列島を「朝鮮半島の東南」とし、現実とは 60～70 度の狂いがある。従って、帯方郡使が最初から倭国の位置に 60～70 度の方位違いの思い込みを持ち、九州上陸したのも大きな理由である。

以上、魏志倭人伝の解明から、邪馬台国宇佐説の合理性を検証した。なお、宇佐での「ヤマト」の地名は宇佐八幡の社家文書から確認でき、鎌倉中期に向野郷「山戸」、南北朝時代に「ヤマト」「大和」とある（富来隆「魏志『邪馬台』の新考察—宇佐『山戸』について」1954 年）。

Ⅱ 卑弥呼と宇佐神宮

1 卑弥呼＝比売大神＝天照大神

1.1 道鏡事件と宇佐神宮

宇佐市の**亀山**（別名は菱形山、小椋山、菱形小椋山）という小高い丘の上に建つ宇佐神宮は応神天皇・比売（ヒメ）大神・神功皇后を祭り、伊勢神宮と共に天皇家の**二所宗廟**とされる。



社殿は向って左から**一の御殿**（八幡大神＝応神天皇＝誉田別尊）・**二の御殿**（比売大神または比咩大神と記す＝三女神）・**三の御殿**（神功皇后＝大帯姫＝息長帯姫）と並び、普通に考えれば**中央の比売大神**が主神で、天皇・皇后より高い神格を持つ。比売大神は宗像三女神の異名同体説が有力だが、古くから異論も多く諸説入り乱れ謎の神社とされる。



神護景雲三年（769年）、大宰府役人の習宜阿曾麻呂が「道鏡を皇位につければ、天下は太平になるであろう」との宇佐神宮の神託があったと偽りの奏上をした。これが事件の発端である。この当時、道鏡は女帝称徳天皇の深い寵愛を受け、太政大臣禪師また法王として位、人臣を極めていた。皇位を天皇家の血筋を引かない臣下の道鏡へ譲るのは、禪譲による王朝交代を意味し、天皇家の一大事である。この非常事態に際し、天皇は皇祖神の神託を得る必要が生じた。

皇祖神は天照大神で伊勢神宮に祭られている。ところが、誰も伊勢神宮の神意を問おうとせず、宇佐神宮に神託を求めるため和氣清麻呂を宇佐へ派遣した。神託は「皇統でない者を天皇にしてはならない」で、道鏡の野望は潰えた。

結局、この事件は伊勢神宮抜きで決着したが、これは何を意味するのか。それは、天皇家と朝廷が皇祖神を祭る真の宗廟は宇佐神宮と考えていたと判断するしかない。

奈良朝から江戸幕末まで、天皇家は伊勢神宮へ千百年間も参拝しなかったのに、国家の大事や天皇の即位時には、宇佐神宮に必ず勅使が遣わされた。このように、伊勢神宮と宇佐神宮は「二所宗廟」として共に皇祖神天照大神を祭るが、実際には宇佐神宮のほうがより重視されていた。それでは、天照大神は宇佐神宮のどこに祭られているのか？それが次に述べる比売大神である。

1.2 卑弥呼＝天照大神＝比売大神

『日本書紀』は神代編の冒頭で天照大神の誕生を次のように記す。

『伊弉諾尊と伊弉冉尊は、「吾すでに大八州国および山川草木を生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ」と共議して、共に日神を生む。大日靈貴と号す、これをオオヒルメノムチと云う』、『一書に云はく、天照大神という。また一書に云はく、天照大日靈貴という』、『一書に曰く。伊弉諾尊が曰くには、「われ、大日靈尊・月弓尊・素戔鳴尊を生む』』。

この内容からすると、天照大神の本名は「大日靈貴（オオヒルメノムチ）」となる。大日靈貴の「大」「貴」は美称尊称で、核心は「日靈」で「ヒルメ」と読む。ヒルメの「ル」は助詞の「ノ」の古語で、現代語で言えば「日の靈」すなわち日靈＝ヒメである。「日靈」と「日の靈」の関係はJR「山手線」「山の手線」と同じである。

(注)：「ヒルメ」の「ル」は助詞の「ノ」の古語

「ヒルメのルは、神魯岐（かむろき）・神魯弥（かむろみ）のロ、神留伎（かむるき）・神留弥（かむるみ）のル、ヒルコのルと同じく、助詞のノの意の古語」（岩波書店の日本古典文学大系『日本書紀』上巻 87 頁の頭注、1967 年。校注は坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋）。

そうすると、天照大神＝ヒメすなわち比売大神で、比売大神は皇祖神・天照大神を祭っていることになる。道鏡事件で称徳天皇が皇位を臣下に譲るかどうかの決断を、この皇祖神・比売大神（天照大神）の神託に求めたのである（表 10）。

比売大神は宇佐神宮の主神として中央に祭られ、応神天皇や神功皇后より神格が高い。天皇や皇后より高い神格を持つ女性は、皇祖神天照大神しかない。

表 10: 卑弥呼＝比売大神＝天照大神（本名:ヒメ）

人物	読み方	核心	読み方
大日靈貴 (天照大神)	オオ ヒルメ ノムチ	日靈	ヒメ
比売大神	ヒメ オオカミ	比売	ヒメ
卑弥呼 (日女子、姫子)	ヒメ コ	卑弥	ヒメ

また、卑弥呼は最近こそ「ヒミコ」だが、第二次大戦まで一貫して姫の尊・姫兒・姫子・日女子＝「ヒメコ」と読まれた。「弥」字は通常「ミ」と発音するが、女性の「姫」を意味する場合は「メ」と読むのが古文献の約束事で、『元興寺縁起』『上宮聖徳法王帝説』『釈日本紀』『延喜式神名帳』に 9 事例が有り、卑弥呼＝ヒメコが本来の

発音である（坂本太郎「魏志倭人伝雑考」『邪馬臺国』1954年）。

この卑弥呼の「ヒメ」が比売大神の「ヒメ」で、卑弥呼（ヒメコ）＝比売（ヒメ）大神である（表 10、表 11）。

表 11: 「弥」文字は、古代は「ミ」「メ」に読み分けられた

『日本書紀』 推古天皇の和風諡号	とよみけ	かしきや	ひめ	のみこと
	豊御食	炊屋	姫	命
『上宮聖徳法王帝説』	とよ みけ	かしきや	ひめ	のみこと
	等已弥居	加斯支移	比弥	乃弥己等
『元興寺縁起』	とよ みけ	かしきや	ひめ	のみこと
	等已弥居	加斯支夜	比弥	乃弥己等
『元興寺縁起』	とよ みけ	かしきや	ひめ	てんのう
	止与弥拳	哥斯岐移	比弥	天皇

応神朝以前で卑弥呼の人物像に該当するのは天照大神である。白鳥庫吉は卑弥呼と天照大神を比較し、「その状態の酷似すること、何人もこれを否認することあたわざるべし」と喝破した。

白鳥庫吉「倭女王卑弥呼考」（明治 43 年—1910 年）：「つらつら神典の文を案ずるに、大御神は素戔鳴尊の荒き振る舞いを怒りて、天の岩戸に隠れさせたまえり。このとき天地暗黒となりて、万神の声は狭蠅のごとく鳴りさやぎ、万妖ことごとく発りぬ。ここにおいて八百万神たちは天安河原に神集いに集いて、大御神を岩戸より引き出したてまつり、ついで素戔鳴尊を逐いやらしかば、天地照明となれり。ひるがえりて【魏志】の文を案ずるに、倭女王卑弥呼は狗奴国男王の無礼を怒りて、長くこれと争いしが、その暴力に耐えずして、ついに戦中に死せり。ここにおいて国中大乱となり、いちじ男子を立てて王となししが、国人これに服せず、たがいに争闘して数千人を殺せり。しかるにその後女王の宗女壹与を奉戴するに及んで、国中の混乱いちじに治まれり。これはこれ地上に起これる歴史上の事実にして、かれは天上に起これる神典上の事蹟なれども、その状態の酷似すること、何人もこれを否認することあたわざるべし」

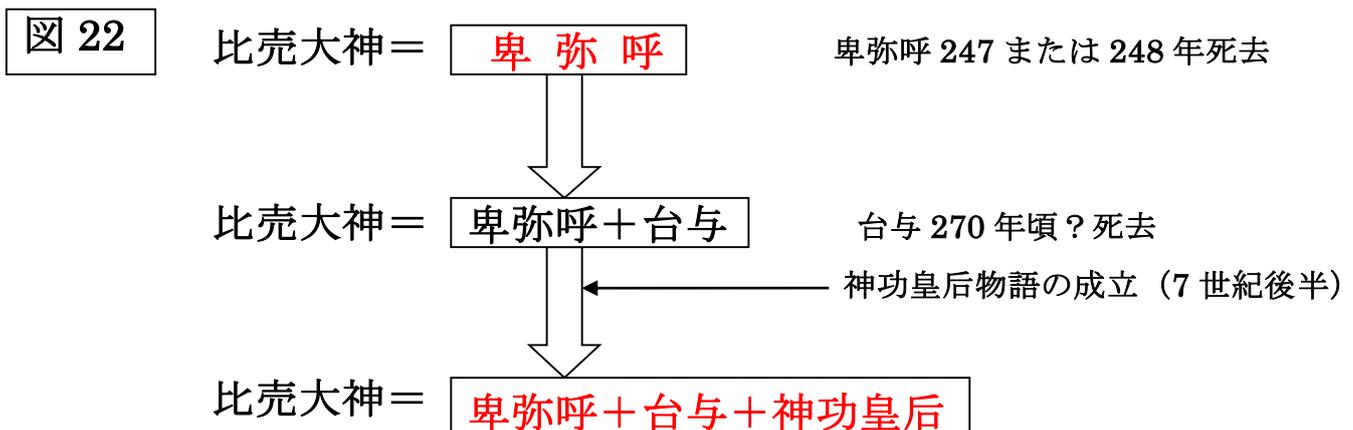
この**卑弥呼＝天照大神**と前述の**比売大神＝天照大神**を合わせると三人は**同一人物**となる。そして、比売大神は卑弥呼＝天照大神を祭る。ただ、「天照大神」との名称は後に 4 世紀前半畿内ヤマト王権で発生した。第 10 代崇神天皇は天照大神を大殿から出して笠縫邑に祭り、次の垂仁天皇が伊勢神宮を創建した。この時初めて「天照大神」の名称が成立したと推定される。このため、宇佐には「天照大神」の名称は存在せず、**本名「ヒメ」が比売大神**として祭られた。

天照大神の岩戸隠れの際には天地暗黒となり、万神の声、さばえのごとく鳴りさやいだ。倭女王が没した後にも、国内は大乱となった。天照大神が岩戸より出ると、天下は、もとの平和に帰った。倭王台与の出現も、また、国内の大乱をしずめた（和辻哲郎『日本古代文化』1920年）。つまり、卑弥呼＋台与＝天照大神で**実像**は神代に送られ、いっぽう、神功皇后は卑弥呼・台与の**虚像**（年代を合わせただけで人物像が異なる）である。そして、伊勢神宮と宇佐神宮は共に卑弥呼と台与を祭り、宇佐神宮では比売大神として祭られている（表12）。

表 12:伊勢神宮と宇佐神宮の祭神（二所宗廟）

伊勢神宮	天照大神＝卑弥呼
	豊受大神＝台与
宇佐神宮	比売大神＝卑弥呼・台与の 実像
	神功皇后＝卑弥呼・台与の 虚像
豊受大神は天照大神の姪（古事記）、台与は卑弥呼の宗女（倭人伝）。従って、台与は卑弥呼の姪だった可能性が高い	

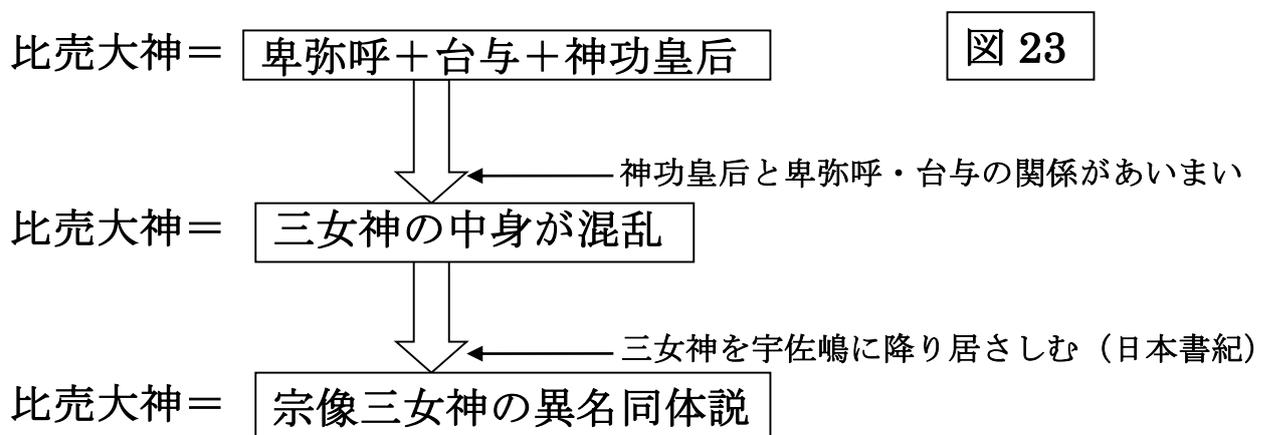
1.3 比売大神＝三女神説の成立



比売大神は太古より宇佐亀山に鎮座され、卑弥呼 ⇒ 卑弥呼＋台与 ⇒ 卑弥呼＋台与＋神功皇后と推移し、**三女神説**が成立した。なお、神功皇后のモデルは女帝齐明天皇（661年没）である（直木孝次郎「神功皇后伝説の研究」1957年）。神功皇后の三韓征伐は、百濟滅亡時（660年）の朝鮮出兵と、応神天皇時代に新羅・高句麗と戦った出来事（4世紀末～5世紀初）を合わせ、応神の母后として描いたものである。

しかし、『日本書紀』は神功紀に魏志倭人伝および晋起居注を引用すると共に、摂政治世 69 年間に AD201～269 年と設定し邪馬台国時代に合わせたが、神功皇后の人物像は卑弥呼・台与とは異なり関係があいまいである（日本書紀は単に倭女王や倭とし、卑弥呼・台与・邪馬台国とは書いていない）。すなわち、神功皇后は**卑弥呼・台与の虚像**となった。

このため三女神の神名が混乱し、**諸説**（太古より鎮座する地主神、玉依姫、大宮能売神、豊玉姫、豊姫、神功皇后、三女神、宗像三女神の異名同体説など）が入り乱れ、**謎の神社**となった。



最終的には**宗像三女神の異名同体説**が有力となったが、この橋渡しをしたのが『日本書紀』一書の「三女神を宇佐嶋に降り居さしむ、今は海北道中に在り」で、これにより三女神の中味が変化した。

（注）宗像三女神：天照大神と素戔鳴尊の誓約で生まれた田心姫・市杵嶋姫・湍津姫（日本書紀）で、福岡県宗像の奥津宮・中津宮・辺津宮に祭られ宗像三女神と総称する。

そして、神功皇后の独立イメージが強まった平安時代（823年）に三の御殿の大帯姫（神功皇后）廟神社が建立された。すなわち、三の御殿の建立（823年）前の**神功皇后**は、二の御殿の比売大神 = **三女神の一人**として祭られていた。

また**応神**は新王朝の創始者（皇統の入り婿）で、高句麗好太王と朝鮮半島の覇権を争い（414年建立の好太王碑文）、母後の神功皇后を通し正統王朝とされ、邪馬台国の故地・宇佐に**八幡神 = 武神**として祭られた。

『日本書紀』の編纂過程（681～720年）で、応神を卑弥呼との関係でどこに祭るか試行錯誤があり、当初は鷹居社（712年）や小山田社（716

年)としたが、最終的にはズバリ**卑弥呼が眠る亀山**に祭られた(725年)。

1.4 二の御殿(比売大神)の成立時期

二の御殿(比売大神)は731年の神託を受け**733年に遷宮**により造営されている(『八幡宇佐宮御託宣集』1313年、神吽の作)。この733年の遷宮をもって二の御殿は一の御殿(725年建立。応神天皇)より成立が遅いと理解する論者も多いが、それは誤り。

遷都と遷宮は意味が異なる。遷都は都の地理的移動を示す。しかし、遷宮は同じ場所での**建て替え**である(伊勢神宮、出雲大社の遷宮と同じ)。従って、二の御殿は**733年遷宮時**より相当以前から社殿が存在し一の御殿(725年)より成立は早く、伝承通り比売大神は太古より宇佐亀山に鎮座されていた。また『宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起』(『承和縁起』とも言う。844年作)も、比売大神は応神天皇より以前から亀山に鎮座していたと記録する(太田静六「宇佐宮本殿形式の成立問題」『大宰府古文化論叢』1988年)。

2 亀山が卑弥呼の墓

2.1 **百余歩の冢**(ちょう)は円墳

2009年、中国河南省で**魏の曹操**(220年没)の墓が発見された。自然丘陵を利用し墓道(長さ40m)を持つ地下式で、墓域の総面積は740㎡と狭い。墓の平面図は台形で東辺22m、西辺20m、東西の長さ18m。レンガを積んだ玄室に壁画はない。また副葬品250点も生前に愛用したものばかりで豪華でなく、薄葬令を裏付ける。

234年、**蜀の諸葛孔明**は五丈原で病没し漢中の定軍山に埋葬された。遺命の「山を墳とし、墓は棺を入れるで足りる」に従い自然の地山を利用し山頂に手を加えた程度で、「高塚古墳」の築造ではない。

このように、三国時代(220~280年)は**薄葬が一般的**であった。魏の墓制の影響を受けた卑弥呼の「冢」も、封土があってもあまり高

くない円形で、前方後円墳ではない（森浩一「卑弥呼の冢」『ゼミナール日本古代史』1979年）。魏志韓伝の「居處は草屋土室を作り、形は冢の如し」は豎穴式住居のことで、この「冢」も円形を示す。魏志倭人伝の「其の死には棺有りて槨無く、土を封じて冢を作る」および卑弥呼の「**径百余歩の冢**」も同様である。また、卑弥呼死後が内戦に陥った状況下で、「大いに冢を作る」と言っても、**箸墓**のような巨大古墳（全長 280m）を築造する余裕はない。

魏国皇帝曹操の墓

箸墓（卑弥呼の墓？）：全長 280m

箸墓と比較し非常に小さい → 

箸墓は全長 280m の巨大古墳で周濠があり、墓域は長さ 400m 幅 300m 程度と推定される。

箸墓の墓域は

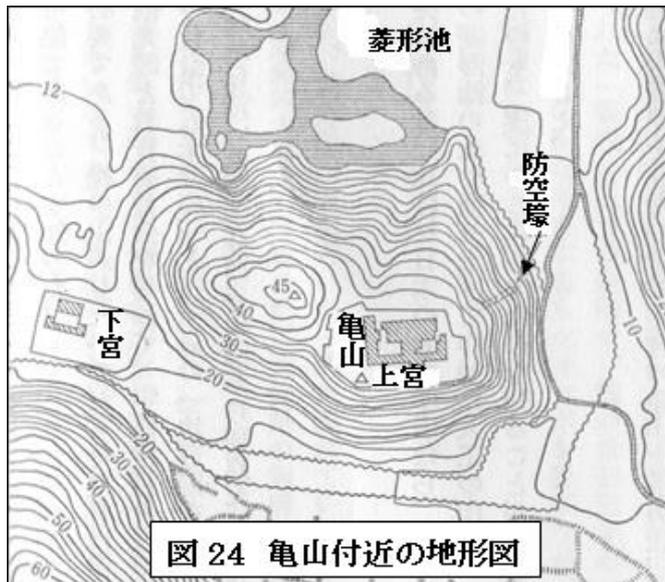
$400\text{m} \times 300\text{m} = 120000 \text{ m}^2$ で曹操墓 740 m^2 と比較し、**162 倍** の広さがある。魏国と邪馬台国の**国力差**から逆なら分かるが・・



2.2 亀山が卑弥呼の墓

①宇佐神宮が建つ亀山の山頂（**直径 70~80m**）に、伝承通り北麓の**菱形池**を掘った土で盛土したのが卑弥呼の「**径百余歩の冢**」。また『八幡宮本紀』は本宮が建つ山上の周りを 390 余歩と記すので直径は 125 歩となり、「**径百余歩**」と一致する。

一方、亀山の下半部に第二次大戦時の防空壕が残っており、**地層が歴然と露呈**し自然の地山である（図 24、原田大六『卑弥呼の墓』1977年）。しかし、初期古墳でも自然丘陵を利用し山頂部分に手を加えた例が多く、亀山も同様である。



②**昭和大造営**（昭和 8～17 年）の昭和 15 年頃、地下に宝物殿を造るため拝殿前広場を長さ数十メートル、深さ数メートル掘り下げたが地層は全く存在せず、性質の違う玉石や角石が無数発見され、山頂は**人工的に盛土**されている（地質専門家の山本聰治の証言）。

③『八幡宇佐宮御託宣集』は「**宇佐廟**」、また『延喜式』神名帳は「大帯姫（神功皇后）**廟神社**」とする。「廟」は「みたまや」とか「もがりの宮」で、山頂は**墓所=冢**である。

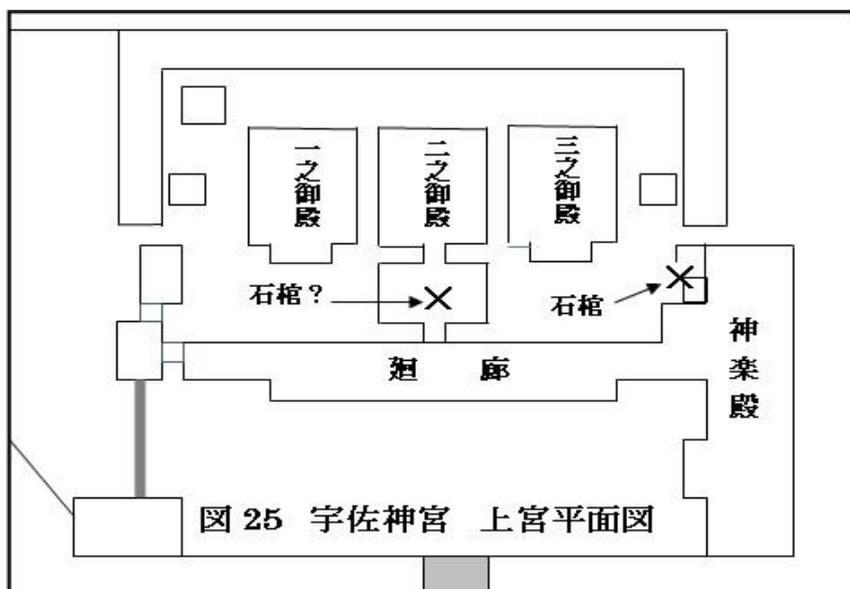
④神社と廟は、もともと**同義語**で墓所を意味する。大帯姫廟神社は「廟神社」と言葉が重複している。この重複を知りながら、あえて「廟神社」としたことには深い意義があり、亀山が墓所であることを強調している（市村其三郎「神功皇后廟神社の謎」1976 年）。

3 謎の石棺の目撃証言

3.1 明治 40 年の目撃証言

宇佐神宮改修時に**石棺が二度目撃**されている（明治 40 年、昭和 16 年）。**明治 40 年**(1907 年)、神楽殿前の広場にそびえる楠の大木と、内陣・三之御殿の向って右側にある楠の巨木が根を張り出し、建物の一部が傾きかけた。そこで、内陣の部分がある程度掘り返し、根

を切断すると同時に建物の一部を修理する工事が行われた。その時、**巨大な石棺**がその全貌をあらわした。目撃証言によれば、「角閃石の一枚岩をくりぬいて作ったと思われる完全な長持形の石棺だった。石の節理の条件からいって耶馬溪付近のものと思われるし、国東半島にはこういう石は存在しないそうである」「この石棺にふれることは許されなかったので、目測にたよるほかはなかったわけなのだが**幅も高さも1メートル強、長さは2メートル数十センチ**、しかも表面はまるで鉋（かんな）でもかけたようなきれいな平面になっていた。とうぜんのことだが、蓋はべつになっており、その間からはみ出したと思われる朱が、横に一線正確な直線を真赤に描き出していた」（**目撃者の山本聰治**の証言を**高木彬光**が著書『邪馬台国推理行』1975年で紹介）。



中津市に住む山本聰治は地質の専門家で長年にわたり大分県の職員をしていた。明治40年当時は10才ぐらいの子供で、父親につれられ修理工事中の囲いの隙間から内陣に入り**石棺を目撃**したという。昭和50年（1975年）1月28日、高木彬光は三重野元（大分県観光休養課）、佐藤四五（宇佐神宮禰宜）と共に宇佐神宮の現場で先程の証言を聞いている。

また昭和54年12月8日には、宇佐市内の若者たちで結成している新邪馬台国建設公団（**高橋宜宏代表**、十人）は山本聰治（当時83才）を現場に招き同様の証言を聞いており、このことが西日本新聞などで報道された。

3.2 昭和 16 年の目撃証言

石棺の**2 回目**の**目撃**は昭和 16 年（1941 年）である。高橋宜宏は次のように記す（「高橋宜宏のヤマタイ国論」HP『新邪馬台国の秘密』2010 年）。

「次にこの石棺が目撃されたのが、**昭和の大造営**の時だ。やはり工事中に石棺が現れ人々の度肝を抜いたという。当時は国家神道の時代で、宮司も内務省から派遣された横山秀雄氏。造営も国家の威信をかけて行われた事業で、同じく内務省技官の角南隆氏が派遣されていた。皇室の宗廟の地から発見された石棺を白日の下にさらしてはならないとの判断からか、横山、角南両名の厳命で、当然のようにもとのところに埋め戻されたそう。ただこの時に石棺を目撃した人は、**昭和 54 年**当時には**何人か存命**しており、私もこの中の一人に直にその事実を聞いたことがある。

彼は後に宇佐神宮の権宮司に就任した**元永正豊氏**だ。彼は宇佐神宮に勤めて間もない頃だったが、ハッキリこの**石棺を見た**という。銅剣等の副葬品もあり、名前はあかさななかったが、この銅剣を持ち去った関係者がいたことも証言している。ただここで一つやっかいな問題がある。それは昭和 16 年に出てきた石棺の場所だが、一説には、**第二神殿前の申殿の下**だったとも言われている。元永氏から私と同じように石棺の話聞いた方が、例の石棺は申殿の下にあったと聞いたと言ふのだ。私の固定観念が場所の確認を怠らせてしまったのだが、元永氏はすでに物故なされており、確認のしようがない。返す返すも残念でならない。もしそうであるならば、宇佐神宮の亀山には**石棺は 2 つ**あることになる」

以上、**明治 40 年**と**昭和 16 年**の目撃証言は極めて貴重である。なお、**卑弥呼**と**台与**はともに亀山に埋葬されたと考えられるので、**石棺が 2 つ**存在しても不思議ではない。

（補注）昭和 16 年は多数の人が目撃しており**信憑性**が高い。酒井富蔵の著書にも「前宮司故・宮成公勲談によると、二之御殿下に石棺がある」と記すとのこと。また、弥生時代が銅剣、古墳時代は鉄剣が基本だから、出土した**銅剣・石棺**は**弥生時代末**の可能性が高い。更に、石棺周辺を大規模に掘り起こしたのに**石室**や**石囲い**の目撃証言が無いことは、倭人伝の「**棺有りて槨無く**」と一致する。

4 奴婢百余人の殉葬と百体神社

亀山の西 900m 余に境外末社の**百体神社**があり、付近に百余人を殉葬した。卑弥呼の墓（亀山）と殉葬百余人（百体神社）を**セット**で**提示**出来るのは宇佐説しかない（久保泉『邪馬台国の所在とゆくえ』1970年）。

百体神社の西横 30m に小さな円墳の**凶首塚**があり（現況は石室が露出）、720～721 年の隼人征伐時に賊の首級を持ち帰り凶首塚に埋葬した（『八幡宇佐宮御託宣集』）。しかし玄室（遺体を安置する部屋）は開口幅・高さ共に 1.5m、奥行き 2.5m の小規模で 100 個の首級を置く広さはなく（50cm 間隔で安置すると横 1 列 3 個×奥行 5 列＝15 個が最大）、**凶首塚**と**百体神社**は**関係ない**。また、『続日本紀』（797 年作）も養老五年（721 年）7 月 7 日条に、「征隼人副将軍従五位下笠朝臣御室、従五位下巨勢朝臣真人ら帰還す。斬首した者と捕虜合計は千四百余人」とするだけである。

百体神社



凶首塚（石室が完全露出）



首級 100 個は
収容出来ない

百体神社の付近に卑弥呼が交戦した狗奴国（隼人、熊襲）の捕虜 100 人を殉葬した。捕虜を奴婢として使用していたが、卑弥呼死去に伴い「**奴婢百余人**」として**殉葬**したのである。一方、隼人征伐時の首級を宇佐廟西の凶首塚（凶土墓）に埋葬したが、単に「首級を持ち帰り」と記録する。そもそも首級は「1 体、2 体、3 体・・・」とは勘定しない。本当に首級 100 個なら「**百首神社**」がふさわしい。ただ同じ隼人を百体神社の近くに埋葬したので、二つが合体し社伝（百体神社は隼人征伐の霊を祭る）が形成された。しかし、「**百体**」の**淵源**は卑弥呼に殉葬された奴婢百余人＝狗奴国の捕虜 100 人である。

Ⅲ 宇佐地方の考古学

1 宇佐を中心とする「豊の国」

邪馬台国宇佐説は**考古学**の面で弱いと言われる。しかし、豊前・豊後を合わせた「豊の国」として見ると、遺跡・出土物は濃厚である。

1.1 遺跡・古墳

宇佐市内の**遺跡**は 333 ヶ所、うち**古墳**は 156 (大分県教育委員会発行『宇佐市内、駅館川大規模圃場整備区域内 埋蔵文化財分布一覧』。賀川光夫その他による学術調査を要約)。また、明治末期に日豊本線工事の際、福岡県側(豊前地域)の行橋～新田原の 4km の間で **60 の古墳**が取り潰された。また昔、この線を汽車で旅行した時は、古墳の群にさえぎられて**海**が見えなかったという話も伝えられている。

1.2 唐原遺跡群

2002 年には国道 10 号線のバイパス工事に伴い、山国川下流域の福岡県大平村の**唐原遺跡群**(豊前地域)で、九州では佐賀県「吉野ヶ里遺跡」・長崎県壱岐島「原の辻遺跡」に次ぐ**大環濠集落**が発見され、弥生後期(1～3 世紀)のクニの中心だったと発表された。東九州でクニの存在を裏付ける遺跡が発見されたのは初めて(西谷正「西日本新聞記事」2004 年)。なお、耶馬溪は江戸時代に頼山陽が山国・山国川から命名したが、「邪馬台国」と「山国・山国川」の関係は気になる。

環濠は三重構造で総延長 1.4 km、内側の広さは 12.4 ヘクタール。最も内側の環濠は延長 600m、面積は 1.6 ヘクタールある。環濠の外の遺跡を含めると**吉野ヶ里に匹敵**する。

この環濠集落から、竪穴式住居跡が約 100、甕棺、石棺墓、ガラス玉、多数の鉄製品、内行花文鏡片、祭祀用土器などが出土した。ただ、**部分的調査**のため全貌は明らかではない。

1.3 出土鏡

1931年（昭和6年）発行の小野精一著『大宇佐郡史論』（宇佐市役所刊）には、「宇佐郡から出土した鏡は300枚を下らない。中国製も相当数あった。宇佐市四日市向山古墳群からだけでも50面以上」と書かれている。ただ残念ながら、これらの鏡は全て盗掘され、どこかに持ち去られてしまったという（高橋宜宏）。

一方、3～4世紀初めの古墳発生期の鏡が出土した全国遺跡総数112ヶ所の中、福岡県41・大分県2で約40%を占める（表13）。

表13：「古墳発生期の鏡」が出土した古墳・遺跡数

福岡	41	岡山	7	香川	6	石川	2
大分	2	兵庫	8	徳島	3	岐阜	1
佐賀	4	大阪	3	愛媛	2	長野	2
山口	3	奈良	9	島根	2	千葉	2
広島	7	京都	7	三重	1	合計	112

（樋口隆康。古代史文化フォーラム「三角縁神獣鏡と邪馬台国」1996年）

しかし、福岡県41のうち昔の行政区分の豊前に属するのが17有り、組み直すと豊国19・筑紫国24で、豊国とくに豊前地方の遺跡が予想以上に濃厚である。

表13の組み換え：福岡県・大分県⇒筑紫国・豊国

福岡県	41	⇒	筑紫の国	24
			(筑前、筑後)	
大分県	2		豊の国	19
			(豊前、豊後)	

以上は一例に過ぎない。鉄鏃などの鉄製品、その他出土物や遺跡を「豊の国」としてまとめると、様相が一変する。邪馬台国宇佐説の

2.2 年輪年代・炭素 14 年代の年代遡上論

近年、**科学的**な年輪年代法と炭素 14 年代法が登場し、これにより弥生時代と古墳開始期が従来通説より **100 年遡上**した。

しかし、**年輪年代法**による弥生中後期・古墳開始期の **100 年遡上論**は完全な誤り。すなわち、奈良時代～現代の測定値は正しいが、飛鳥時代の **640 年以前**は **100 年古く**狂っている。

記録と照合可能な 15 事例(法隆寺五重塔心柱・法起寺三重塔心柱・元興寺禅室部材・紫香樂宮跡柱根・東大寺正倉院板材)では、640 年以前を示す測定値が**全て 100 年古く**狂っているのは明白である。これら以外に記録と検証可能な事例は存在しない。**弥生・古墳時代**も、池上曾根遺跡・石塚古墳・勝山古墳などの測定値も 100 年古く狂っている。

また、**炭素 14 年代**は原理上で 100～200 年以上の幅があり、その幅の中で年輪年代法による年代観に合わせて古い方の測定値を採用しているに過ぎない。

従って、**古墳時代の始まり**は従来通説の **300 年頃**が正しく、邪馬台国は弥生時代末で、最近の畿内説が最大根拠とする弥生・古墳時代の年代遡上論は根底から崩れる。結論として、「箸墓＝卑弥呼の墓」「纏向遺跡＝邪馬台国の王都」説は全くの誤り。

なお、この年輪年代・炭素 14 年代については、日本考古学協会第 79 回総会発表「**年輪年代法の問題点**」(2013 年 5 月 26 日)を後ほど説明する。

以上